

『幼稚百人一首宝箱』紹介

「日本古典籍総合目録」によれば、『幼稚百人一首宝箱（をさなひやくにんいつしゆたからばこ）』は早稲田大学に一本があるのみである。筆者は同じものを入手したので、ここに紹介したい。

いずれも大本であるが、早大本が原表紙であるのに対して、筆者蔵本は替表紙である。本文は同一で、刊年不明、いずれも河内屋平七版である。早大本表紙には、題簽の外に目録が貼付されているが、筆者蔵本は題簽のみである。ただし、早大本の表紙目録は剥落が激しい。題簽の文字は、角書様の部分に「日用女子教艸」（日用は左右に別れている。「女子」と「教艸」が角書）とあり、「幼稚百人一首宝箱全」の上八文字分に「をさなひやくにんいつしゆたからばこ」と振り仮名がある。

漢字は通用文字を使用した。振り仮名は省略。清濁は原本とおりである。パソコンで出ない漢字は「」とした。判読不能文字は「？」とした。

早大本については、早稲田大学図書館ホームページ「古典籍総合データベース」に写真版が掲載されることである。

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

一 内容

以下、内容を紹介する。判読不明箇所は相互に補った。

構成は、下段に百人一首を配し、上段（全体の三分の一ほど）に次のような記事を並べている。

和歌之三神
吉書詩歌

七夕詩詞
四季用文章
鏡の由来
人間生涯の祝義
男女名頭
男女相性考
四悪十悪の事
新改正服忌令
源氏香の図引歌
産帯要録
産前後食物善悪
掛香之方
しみものおとし
そめもの秘伝
女中詞の事
新衣服着初吉方
十二月の和名
琴三絃の事
琴の名取
三絃の名所
うんこう日
うけむけの事
守本尊を知る歌
不成就日之事
願じやうじゆ日
折形図

二 百人一首翻刻

以下、下段の「百人一首」を翻刻し、続いて上段の記事を翻刻する。振り仮名は省略した。

天智天皇

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我衣手はつゆにぬれつゝ
持統天皇

春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山
柿本人麿

足曳の山鳥の尾のしだりをのなが／＼しよをひとりかもねん
山辺赤人

田子の浦にうち出て見れば白妙のふじの高ねに雪はふりつゝ
猿丸太夫

奥山にもみぢふみわけなくしかの声きく時ぞ秋はかなしき
中納言家持

鶺鴒のわたせるはしにおく霜の白きをみれば夜ぞ更にける
安陪仲麿

天の原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山に出し月かも
喜撰法師

我庵は都のたつみしかぞすむよをうぢ山と人はいふなり
小野小町

花の色はうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに
蝉丸

是やこの行も帰るも別れては知るもしらぬもあふさかの関
参議篁

和田の原八十鳶かけて漕いでぬと人にはつげよあまの釣船
僧正遍昭

天津風雲のかよひぢ吹とぢよ少女のすがたしはしとゞめむ
陽成院

筑羽根の峯よりおつるみな川の川恋ぞつもりて淵となりぬる
河原左大臣

みちのくのしのぶもぢぢり誰ゆゑに乱れ初にし我ならなくに
光孝天皇

君がため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ
中納言行平

立別れいなばの山の峯におふる松としきかば今帰り来ん
在原業平朝臣

千早振神代もきかず龍田川から紅に水くゝるとは
藤原敏行朝臣

住の江のきしによるなみよるさへや夢のかよひぢ人目よくらん
伊勢

難波がたみじかき芦のふしのまもあはで此世を過してよとや
元良親王

侘ぬれはいまはたおなじ難波なる身をつくしてもあはむとぞおも
ふ

素性法師
今こんといひしばかりに長月の有明の月を待出つるかな

文屋康秀
吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらん

大江千里
月見れば千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど

菅家
此たびはぬさも取敢ず手向山もみぢの錦神のまに／＼

三条右大臣
名にしおはゞあふさか山のさねかつら人にしられてくるよしもが
な

貞信公

小倉山みねの紅葉ば心あらば今一たびの御幸またなん
中納言兼輔

みかの原わきてながるゝ泉川いづみきとてかこひしかるらん
源宗于朝臣

山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば
凡河内躬恒

こゝろあてにおらばやおらんはつ霜のをきまどはせるしら菊のは
な

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかりうきものはなし
坂上是則

朝ぼらけ有明の月とみるまでに芳野のさとにふれるしら雪
春道列樹

山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢ成けり
紀友則

久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらん
藤原興風

誰をかも知る人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
紀貫之

人はいざこゝろもしらず古郷は花ぞむかしの香にゝほひける
清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらむ
文屋朝康

しら露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散ける
右近

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命のをしくも有哉
参議等

浅ぢふのをのゝ篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき
平兼盛

忍ぶれど色に出にけり我こひは物やおもふと人のとふまで
壬生忠見

恋すてふ我名はまだき立にけり人しれずこそおもひそめしが

清原元輔

ちぎりきなかたみに袖をしほりつゝ末のまつ山浪こさじとは
中納言敦忠

逢見ての後の心にくらぶれはむかしは物をおもはざりけり
中納言朝忠

あふ事の絶てしなくは中ノゝに人をも身をもつらみざらまし
謙徳公

哀ともいふべき人はおもほえて身のいたづらになりぬべきかな
曾禰好忠

由良の戸をわたる船人かぢをたえ行衛もしらぬ恋の道かな
恵慶法師

八重葎茂れるやどの淋しきに人こそ見えね秋はきにけり
源重之

風をいたみ岩つつ浪のおのれのみくだけて物をおもふ比かな
大中臣能宣朝臣

御かきもり衛士のたく火の夜はもえひるは消つゝ物をこそおもへ
藤原義孝

君がためおしからざりし命さへながくもがなとおもひけるかな
藤原実方朝臣

かくとだにえやはいふきのさしもぐささしもしらじなもゆるおも
ひを

藤原道信朝臣
明ぬればくるゝ物とは知りながらなをうらめしきあさぼらけかな

右大将道綱母
歎きつゝひとりぬる夜のおくるまはいかに久しきものとかはしる

儀同三司母
忘れしの行すゑまではかたければけふを限りの命ともがな

大納言公任
滝の音はたえて久しく成ぬれど名こそながれて猶きこへけれ

和泉式部

あらざらむこの世の外のおもひ出に今一たびの逢こともがな
紫式部

めぐりあひて見しやそれとも分ぬまに雲隠れにし夜半の月かな
大弐三位

有馬山ゐなのさゝ原風吹ばいでそよ人を忘れやはする
赤染衛門

やすらはで寝なまし物をさよ更てかたふくまでの月を見しかな
小式部内侍

大江山幾野のみちのとをければまだふみも見ず天の橋立
伊勢大輔

古しへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな
清少納言

夜をこめて鳥の空音ははかるともよにあふさかの関はゆるさじ
左京大夫道雅

今はたゞおもひ絶なんとばかりを人伝ならでいふよしもがな
権中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえ／＼に頭れわたる瀬々の網代木
相模

うらみわびほさぬ袖だに有ものを恋にくちなん名こそおしけれ
前大僧正行尊

もろともに哀とおもへ山桜花より外にしる人もなし
周防内侍

春の夜の夢ばかりなるたまくらにかひなくたゞん名こそおしけれ
三条院

心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな
能因法師

あらし吹三室の山の紅葉ははたつたの河のにしき成けり
良暹法師

淋しさに宿を立出て眺れはいつこもおなじあきの夕暮
大納言経信

夕ざれば門田のいなば音信てあしのまるやに秋風ぞふく
祐子内親王家紀伊

音に聞たかしの浜のあだ浪はかけじや袖のぬれもこそすれ
前中納言匡房

高砂の尾上のさくら咲にけりとやまのかすみたゞずもあらなん
源俊頼朝臣

うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとはいのらぬものを
藤原基俊

契りをきしさせもが露を命にて哀ことしの秋もいぬめり
法性寺入道前関白太政大臣

和田のはら漕出て見れば久かたの雲井にまがふおきつしらなみ
崇徳院

瀬を早み岩にせかるゝ滝川のわれてもすゑにあはんとぞおもふ
源兼昌

淡路鳥かよふ千鳥のなく声に幾夜寝ざめぬすまの関もり
左京大夫顕輔

秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出る月の影のさやけさ
待賢門院堀河

ながゝらむ心もしらず黒髪のみだれてけさは物をこそおもへ
後徳大寺左大臣

ほとゝぎす鳴つるかたをながむれはたゞ有明の月ぞ残れる
道因法師

おもひ侘さても命は有ものをうきに絶ぬはなみだなりけり
皇太后宮太夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひいる山のくにも鹿ぞ鳴なる
藤原清輔朝臣

ながらへばまたこの比やしのはれんうしとみしよぞ今はこひしき
俊恵法師

夜もすがら物おもふ比は明やらで寝屋のひまさへつれなかりけり
西行法師

なげゝとて月やは物をおもはするかこちがほなるわが涙かな
寂蓮法師

むら雨の露もまだひぬ槇の葉に霧たちのぼるあきの夕暮
皇嘉門院別当

難波江のあしのかりねの一夜ゆへ身をつくしてやこひわたるべき
式子内親王

玉の緒よ絶なばたえねながらへは忍ぶることのよほりもぞする
殷富門院大輔

見せばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず
後京極摂政前太政大臣

蛭なくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん
二条院讃岐

我袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかはくまもなし
鎌倉右大臣

世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟のつなでかなしも
参議雅経

み吉野の山のあき風小夜更てふるさと寒くころもうつなり
前大僧正慈円

おほけなくうき世の民におほふかな我たつ袖に墨ぞめの袖
入道前大政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは我身成けり
権中納言定家

こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ
従三位家隆

風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるし成ける
後鳥羽院

人もおし人もうらめしあぢきなく世をおもふ故に物おもふ身は
順徳院

百敷やふるき軒ばのしのぶにも猶あまりあるむかし也けり

三 頭書翻刻

和歌之三神

住吉大明神

むつましと君はしらすやみつかきの久しき世よりいわみそめ

てき

柿本大明神

梅の花それともみへずひさかたのあまきる雪のなへてふれゝ

ば

玉津嶋大明神

たちかへりまたも此世にあとたれむ名もなつかしき和歌の浦

なみ」(表紙見返し)

(絵)「(一才)

吉書詩歌

嘉辰令月歎無極万歳千秋楽未央

万代とみかさの山ぞよばふなるあめのしたくもたのしかるらし

長生殿裏春秋富不老門前日月遅

君が代は千世ともさたして天の戸やいづる月日のかぎりなけれ

ば」(一ウ)

今日不知誰計会春風春水一時来

袖ひぢてむすびしみづのしほれるをはるたつけふの風やとくら

む」(二一オ)

池凍東頭風度解窓梅北面雪对寒

わが宿のこず糸計と見しほどに四方の山辺もはるは来にけり

柳無気力条先動池有波文氷尽開

きみが代は千代に八ちよにさゞれ石のいはほとなりて苔のむす

まで」(二一ウ)

青山有雪諳松性碧落無雲称鶴心

鶯のこへなかりせばゆきゝえぬ山ざとちかく春をしらまし」(三

オ)

七夕詩調

憶得少年長乞巧竹竿頭上願糸多

棚ばたの雲の衣をひきかさねかへさでぬるや今よひ成らん

風従昨夜声弥怨露及び明朝涙不禁

あさからぬ契しかれて天の川逢瀬にわたすかさゝきのはし」(三ウ)

雲霞帳巻風消息烏鵲橋連浪往来

年ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずぞすくなかりける」(四オ)

ちぎりけんこゝろぞつらきたなばたのとしにひとたびあふは逢かは

天の川あきをちぎりしことの葉やわたす紅葉のはしとなりけむたなばたに心をさへやかにけむ今よひあふせのうれしかりけり

草のうへに露とる今朝のたまづさに軒端の梶はもとつ葉もなし天川よをながつきもあるものをなど初あきをちぎりそめけん」

(四ウ)

天川ながるゝ月のこゝろして稀のあふせにひかりとゞめよ

七夕の逢ふ夜の庭におく琴のあたりにひくはさゝがにのいと

たきものを雲のころもにほはせてたなはたつめの暮をまつらん

銀河あふぎの風にきりはれて空すみわたるかさゝぎのはし

天のがはくらしかねたるともしづまわたるをいそぐぬさ手向なり」(五オ)

(絵)」(五ウ)

四季用文章

正月

初春の御寿いつ方もおなし御事にいはひ入まいらせ候みなノ様御揃遊はし御機嫌よく御としむかへさせられめてたく存上まいらせ候さては此しなあらノしくおはしまし候へとも御祝ひの印までに御めにかけまいらせ候万々年めてたくかしく」(六オ)

二月

此程は漸く春めきまいらせ候て野山のけしきも霞わたり所々の梅さかりのよしうけ給はりまいらせ候いつれへ成とも御供致し

一日遊覧いたし申たく御返事にまかせ用意致しまいらせ候かしく」(六ウ)

三月

桃の御節句めてたく存まいらせ候五もし様かた御雛まつり遊はし御賑々敷御事と存上まいらせ候さては此草のかちん御はこけふの御祝義申上候しるし迄に進しまいらせ候めて度かしく」(七オ)

四月

一筆申上まいらせ候きのふは御人々と山里へ御こしにて時鳥のはつ音きこしめし卯花月夜に御かへらせのよし御浦山しく存上まいらせ候さそかしおもしろき御詠も候事御きかせねかひ上申候かしく」(七ウ)

五月

菖蒲の御しうき御めてたく申こめまいらせ候ことに和子様御初の御いはひにて御のほりの鰯賑ノの御事とそんし上まいらせ候さては此笹ぢまき御たえノしくおはしまし候へとも御めにかけまいらせ候めてたくかしく」(八オ)

六月

暑中なからことの外なるあつさにおはしまし候みなノ様御きけむよく御凌ぎ遊はしまつノ御めてたく存上まいらせ候爰許相かはらすくらしまいらせ候間憚ながら御気もしやすく思しめし下さるへく候まつは時こう御見まひ申上たさあらノめてたくかしく」(八ウ)

七月

七夕の御祝義御目出たくそんし上まいらせ候ことに御天気もよろしく今宵のあふせさそかしとおもひやられまいらせ候さては此なてしこ手向草にと送りまいらせ候猶夕かた御こしのほと念し

入まいらせ候めてたくかしく」(九才)

八月

秋の最中の月今宵と相なり心も空に成まいらせ候雲のさはりもあるましく見えまいらせ候まゝかねノ御うはさ申上おき候席をまうけ置まいらせ候暮早々より御こしまち入候かしく」(九ウ)

九月

菊重ねの御祝儀めて度そんしまいらせ候山路の菊と名つけ申候此九献一たる進上いたしまいらせ候千とせを経へきけふの御祝ひ申上まいらせ候しはかりにおはしまし候めてたくかしく」(十才)

十月

亥の子の御いはひとで見事なる御重のうち送り下され御うれしく存まいらせ候時分とてさむさ催しまいらせ候て炉のほとりも心よく成まいらせ候御咄しに御こしまち入候まづは御礼まであらゝめて度かしく」(十ウ)

十一月

一筆申上まいらせ候御娘子様事御かつき初の御祝ひとて参しましか様仰下され御うれしく存上まいらせ候御しきなく夫々さんし候てよろつノ御よろこひ申上まいらせ候てめて度かしく」(十才)

十二月

寒中なからことの外のさむさにおはしまし候皆々様御そろひあそはし御きけむよくいらせられ御めてたくそんし上まいらせ候扱は此みかん一かこ見舞申上まいらせ候しるしまてにしんしまいらせ候末筆ながら御隠居様方へもよろしく御つたへ下さるへく候めてたくかしく」(十一ウ)

鏡の由来

鏡は天照大神白銅のかゝみをつくらせ給ふ瓊瓊杵尊に三種の神宝の内此宝鏡我を見ることくすべしとみことによりて御神体とす是八咫のかゝみなり其後人皇第十代崇神天皇の御とき此靈鏡

の神威を恐れたまひ大和の国磯城の郡に宮居を建齋奉り給ふ内裏には神鏡の御影を写しとゞめ宝殿にはおさめたまふ其後天徳四年九月内裏炎上るとき神鏡とひ出たまひ桜にかゝり給ふを内侍袖に受奉り納給へり夫より神鏡を内侍所と申奉るよつて惣じて鏡は」(十二才) 神霊の乗うつりおはしますものなれは大切に所持して常にくもらすへからずかしく曇らし置時は思ひ事たへずわざはひ来る

櫛はこれもいざなぎの尊湯津の爪櫛をさし給ふ事あり又手摩乳がむすめ稲田姫を素戔尊に参らするとき清櫛をさして后もいはひ奉るとありあさごとに髪を削るときは諸の悪気におかされず又櫛をなけまじきものと申伝侍る

守刀といふも三種の神器を写したる物なり宝剣なり神の代には天の村雲草なきの剣ともいふ尾張のあつたの宮に神体とし崇給ひ御影の剣を写」(十二ウ) し留おき宝剣と申奉る悪鬼降伏のものなり

笄はもろこし女の娘竹を以てかんざしとして髪を貫く堯王のときに銅を以て作り横につらぬく舜王象牙玳瑁を以てし給ふこれはいしめなりいにしへは女にかぎらず男もかんざしさしけるよし又雑粗といふ書に見ゆ

御伽道子は天児をやつしたるもの也といへり天児は凶事を除く人形也寸法定有頭はねり絹にて十二のひた有衣裳は白に袖両わなに仕立模様は鶴亀松竹也これをよめ入の乗物の前にたてをくなり衣しやうきせをかんどり小袖といふ小児五才七才迄」(十三才) あたらしき物きする時先此人形にきせそめてきすべし悪事さいなんをのがるゝといふ又？人の後ゑな桶にも天児のかたちをつくり入るなり

犬張子とのゐの犬といふよめいりの手道具なりねやにをく也」(十三ウ)

人間生涯の祝義
生れてより七日めを一七夜といふ此日名を付産ぎぬをきせる男は

左の袖よりとをし女は右の袖よりとをすへし

忌明は男は卅二日め女は卅三日め氏神へ参詣す

喰初は百廿日め生れ子に膳をすゆる男は女の左のひさの上にあけ女は男の右のひさの上へあげくめるまねをする也

誕生日は二歳のとき出生の日をいふ夫より一代いふなり

髪置は一二歳の十一月十五日也形の上綿をかけ氏神へ参詣す(十四才)

袴着は男子五歳の十一月十五日なり左のあしより入させる

被初は女子四歳の十一月十五日男女ともに八歳にて手習よみ物さすべし

元服十五六歳にてす元服とて角を入れる一兩年にて前髪をとりおさな名あらためる也女は顔なをしとて眉をとりはくろつくる事縁組定りて齒をそめ懐胎ありて眉をとる事さたまれる祝義なれども奉公する人は格別年わかくと顔なをす

婚礼法体までいづれしうぎ分限相応にいわぬ給ふへし(十四ウ)

男女名頭

木性 水性金性もよし

豊 福 杵 峯 邦 筆 逢 美 武 米 八 磐 民 本

紋 文 万 満 弁 伴 末 卯 馬 芳 房 平 茂 富 繁

品 波 麻 梅 牧 明 保 浜 半 百(十五才)

火性 木水性にもよし

国 吉 磯 銀 金 吟 久 琴 糸 義 高 経 京 絹

駒 覚 光 歌 寛 季 関 卷 彦 菅 岸 元 源 近 谷

弓 幾 崎 勘 岩 亀 権 嘉 五 亥 鍋 牛 玉 末

菊 九 儀

土性 木火性にもよし

陸 力 直 猶 鹿 楽 滝 隆 律 林 浪 宅 住 町

貞 定 綾 藤 忠 仲 徳 竹 六 類 達 理 利 里 治

猪 団 丈 大 太 多 ? 鉄 重 龍 蘭 伝 長 良

来 頼(十五ウ)

金性 土火性にも吉

慎 音 乙 弦 伊 鶴 宇 牧 永 熊 友 勇 庸 為

唯 喜 衣 依 与 寅 愛 一 延 悦 円 倭 安 歎 孝

要好 和 花 幸 栄 英 行 盈 益 由 祐 猶 楊

用(十六才)

水性 金土性もよく

専 助 辰 信 清 佐 淑 秀 増 三 常 捨 石 尚

政 正 庄 勝 倉 蔵 小 照 周 雪 浅 善 仙 新 甚

孫 順 俊 春 千 七 市 時 初 作 巳 才 宗 惣

松 種 次

右名がしらす字は韻経といふ書より考へ出せる処なればそれノノ性に相応せりいづれをもこのみにしたがひてもちゆべし但男は勿論女にても天使將軍又は其領主等の御諱の字は必ずはゞかるべし(十六ウ)

(表)(十七才)

男女相性考

男木女火子五人大によし初はくぜつあれども後ふつきなりいのち長し但しゆそのたゞりあり氏神をまつりてよし春より草木のさ

かふるがことし

いにしへのいかれる神のむすびにておもふまゝなるすゑぞ楽しき

(十七ウ)

男木女木はじめよし後わるし子式人か五人ありひんせんにして

くろう多し荒神を祭りてよし

ちはやふる神もあはれとおぼすらんいがきのうちをたのむわが身

を

男木女土子三人ありたゞしじやけんなれは子にゑんなし常に思

ひ事あり神仏につかへてよし

わが世こそなみの人にはすぐれたれよるづのたからとほしからね

は(十八才)

男木女金はじめよしのちわるし子式人あるべしことにせいじん

してくせつあるべし

あひそめしてのはたにもなかりせばきみをつらしとおもはざらまし

男木女水大によし子五人富貴にして命ながしうぢ神をまつりてよしてんはたに縁あり

あらたのしふたりが中にくらたてゝ世をふるることぞ嬉しかりけれ
(十八ウ)

男火女火よろしからす衣食ともにまづし但しくはう神をいのりてよし

ひにならべ恋しきことのいやましてかゝるあそびにあふぞくやしき

男火女土大によし子三人又八九人もあるべし命ながし荒神をまつるべし諸事心のまゝなり

あひそめし心をふかく結びてしきみがなさけの忘れがたさに
(十九オ)

男火女木大によし子二人もしくは八人ふつきにしておもひ事なしうし午にゑんあり

たのもしさかくすぎなんと思へどもぐせをねかふぞわびしかり

男火女金大にあしゝいしよくともにまつし神仏を深くいのるべし但世の人にしらるゝことあり

いつしかとおもひ忘るゝひまもなくものおもふことぞわびしかりける
(十九ウ)

男火女水大にあしゝ子あれどもまづし衣食ともにとぼしつねにくぜつたへず

もろともにあはぬ心はなけれ共わが身ひとつに生る子はなし

男土女土はしめよし後わるし子三人あれども何事もおもふにちからなし

身をくだき胸をほのほに焦共いけるかひなき我身なりけり
(廿オ)

男土女金大によし子九人あり田はたに付ことによしつねに竈の神をまつるへし心のごとくめでたし

にしひがしふたりか中にくらたてゝさけのいづみのわくとおもへば

男土女水大にあしゝ子なし何ごとも心ならずものをうちおとすやうに力なし後はよし

土みづはくさ木の種と聞つるがいふにわれらは生れ子もなし
(廿ウ)

男土女木半よしはじめはまつしけれとも後はよし子五人あり侍は所領をもち商人もよし

土と木はそのあるなる中なれどいのれば神のめぐみ有けり

男土女火大によし子五人衣食ともにおほし何事も心のまゝ也無病にて命長し

あらうれしいとゝたのしき我身かなよるつものにとぼしからねば
(廿一オ)

男金女金大にあしく子一或人あるべしやまひごとたへず天神を信すべし後はわるし

いかにせんかゝるさはりのある中によきはすくなきやまひ也けり

男金女水大によし子五人ふつきにして命ながしてんばたおほし氏神を信じて心のまゝ也

いにしへも今もむかしも此ころもきのふもけふも楽しかりけり
(廿一ウ)

男金女木大にわるし子或人あれども吉人は不具なるべし物こと心のまゝならず

世中にすむかひもなき我身哉つねにこゝろのなかげきたへねば

男金女火大にあしゝ子一人あれとも命みぢかし貧にしておもふことちがふへし

むかしよりめぐる夫婦にあひ初てつねにおもひのやむことぞなき
(廿二オ)

男金女土大によし子五人か九人ふつきにして天下をしり命なが

し下人多くつかひ心のまゝ也

いにしへも結びそだてしたうのはこ日にノ、そひてたのしかりけり

男水女水半よし子八人あるべしたゞし貧にしてのちわるしうち神を祭るべし

たづぬればなきものゆゑか苦しみてあけくれのべをかへるうれしさ」(廿二ウ)

男水女木子三人か七人あり法華経をたふとみふげん菩薩を信すべし富貴にして万事大吉也

世中にたのしきものは多けれどわれにまされ人はあらしな

男水女火大にあしゝ子あれどもそだゝすくせつ常にたへず神仏をたふとみてよし

よのなかにかゝるわびしきめをみるも人にしられぬ身をぞうらむる」(廿三オ)

男水女土大にあしゝ子四人ありてとぼしきなりくぜつことありて万わるし

世中にうまれきたれるかひもなく身をはうらむるやまひたえせず

多し氏神をまつりてよし

此世にてかゝるたのしみめでたさよむかしの神にちかひなるらん」(廿三ウ)

四悪十悪の事

四あく十あくといふ事往古はいはざる事なるよし中比より大にいみきらふ事となれりまつ女のとしより四つめ十めをいふなりたとへば女十七才子としの者男廿才卯どしと四あく也男卯より辰巳午未申酉戌亥子と女の子としと十悪なり必年のかずにあらず十二支をくりていふなりされど人により四悪十あくの夫婦中よく家富さかふるもかすノ、あり但正直と信心とによるなり」(廿四オ)

新改正服忌令

父母 忌五十日 服十三ヶ月

夫 同五十日 同十三ヶ月

妻 同廿日 同九十日

嫡子 同廿日 同九十日

末子 同十日 同三十日

夫の父母 同三十日 同百五十日

祖父母 同三十日 同百五十日

母方は 同三十日 同九十日

曾祖父母 同廿日 同九十日

伯父母 同廿日 同九十日

母方は 同十日 同三十日

兄弟 同廿日 同九十日

嫡孫 同三日 同七日

末孫 同三日 同七日」(廿四ウ)

曾孫 同三日 同七日

従弟 同三日 同七日

甥姪 同三日 同七日

七才まではいみ服なしたゞし七才までの子死せるときは遠慮三日すべし其外同姓のしんるいは当才にても遠慮一日すべし

一産けがれ 父七日 母七十五日

一糸なおきむかへ いみ七日

一流さん 父五日 母十日

一ふみ合 行水次第

一重服の事 父死すいまた服中に母死するときは其日より十三ヶ月を着し二年着するに及ばず軽重かさなるときは重きかたの忌服をきるべし

服忌令年」(廿五オ)

源氏香の図引歌(歌のみ示す)

桐壺 幼なきはつもとゆひにながきをよを契る心ぞむすびこめつや
帚木 数ならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらできゆる
はゝきゝ」(廿五ウ)

空蝉 空せみの身をかへてける木の下になほ人がらのなつかしき
かな

夕顔 よりてこそそれかとも見めたそかれにほの／＼みゆる花の
夕がほ

若紫 手につみていつしかも見ん紫のねにかよひける野へのわか
草^一(廿六才)

未摘花 なつかしき色ともなしになに／＼このすゑつむ花を袖にふ
れけむ

紅葉賀 物おもふにたちまふべくもあらぬ身の袖うちふりし心し
りきや

花宴 いづれぞと露のやどりをわかぬまにおぎ／＼の原に風もこそ
ふけ^一(廿六ウ)

葵 はかりなき千尋のそのみるふさのおひゆくすへは我のみぞ
見ん

賢木 神がきはしるしの杉もなきものをいかにまがへておれるさ
かきぞ

花散里 たちはなの香をなつかしみほと／＼ぎす花ちるさとをたづ
ねてぞとふ^一(廿七才)

須磨 うきめかるいせおの海人を思ひやれもしほたるてふすまの
うらにて

明石 あきの夜のつきけの駒よ我こふる雲井をかけれ時のまも見
ん

淺標 かずならでなにはの事もかひなきになに身をつくしおもひ
そめけん^一(廿七ウ)

蓬生 尋ねてわわれこそとはめ道もなくふかきよもぎがもとの心
を

関屋 逢坂のせきやいかなる関なればしけきなけきの中をわくら
ん

絵合 うきめみし其おりよりりもけふはまた過にしかたにかへる
なみだか^一(廿八才)

松風 身をかへてひとり帰れるふるさとに聞しに似たる松風ぞふ
く

薄雲 いり日さす峯にたなびくうす雲は物おもふ袖にいるやまが
へる

朝顔 見し折の露忘れぬあさがほの花のさかりはすぎやしぬら
ん^一(廿八ウ)

乙女 をとめ子が神さびぬらしあまつそでふるきよのともよはひ
へぬれば

玉葛 恋わたる身はそれなれど玉かつらいかれるすちを尋きぬら
ん

初音 年月をまつにひかれてふる人はけふうぐひすの初音きかせ
よ^一(廿九才)

胡蝶 花ぞの／＼こてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るら
ん

蛩 声はせで身をのみこがすほたるこそいふよりまさるおもひな
るらめ

常夏 なでしこのとこなつかしき色をみはもとのかきねを人やた
づねん^一(廿九ウ)

篝火 か／＼り火にたちそふ恋のけふりこそよにはたへせぬほのほ
なるらん

野分 風さはぎむら雲まよふ夕にもわする／＼まなくわすられぬき
み

行幸 をしほ山みゆきつもれる松原にけふばかりなる跡やなから
ん^一(卅才)

藤袴 をなじの／＼霧にやぬる／＼ふちばかまあはれはかけよかごと
ばかりに

真木柱 今とはて宿かれぬともなれきつるまきのはしらよわれを
わするな

梅枝 花の香はちりにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしま
めや^一(卅ウ)

藤裏葉 春日さす藤のうらはのうらとけて君し思はゝ我もたのま
ん

若菜上 小まつはらす糸のよはひにひかれてや野辺のわかなもと
しをつむべき

若菜下 ゆふやみはみちたどノ、し月まちてかへれ我せこそそのま
にもみん」(卅一オ)

柏木 いまはとてもへん煙もむすぼゝれたえぬ思ひのなをやのこ
らん

横笛 よこぶえのしらべはことにかはらぬをむなしくなりし音こ
そつきせぬ

鈴虫 こゝろもて草のやとりをいとへどもなをすゞむしの声ぞふ
りせぬ」(卅一ウ)

夕霧 山ざとのあはれをそふる夕ぎりに立いでんかたもなきこゝ
ちして

御法 たえぬべきみのりながらぞたのまるゝよゝにとむすぶ中の
ちぎりを

幻 大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬたまのゆくゑたづね
よ」(卅二オ)

匂宮 おぼつかなたれにとはましいかにしてはじめもはてもしら
ぬ我身ぞ

紅梅 心ありて風の匂はすそのゝ梅にまづ鶯のとはずやあるべき
竹川 たけ川のはしうちいでしひとふしにふかき心のそこはしり
きや」(卅二ウ)

橋姫 橋姫の心をくみてたかせさすさほのしづくに袖ぞぬれぬる
椎本 たちよらむかげとたのみししるがもとむなしきとこになり
にけるかな

総角 あげまきにながきちぎりをむすびこめおなじところにより
もあはなん」(卅三オ)

早蕨 このはるはたれかにみせんなき人のかたみにつめる峯のさ
わらび

宿木 やどりきとおもひ出すはこのもとのたびねもいかにさびし
からまし

東屋 さしとむるむぐらやしけきあづまやのあまりほどふるあま
そゝぎかな」(卅三ウ)

浮舟 たち花のこじまの色はかはらじを此うきふねぞゆくゑしら
れぬ

蜻蛉 ありと見て手にはとられず見ればまた行衛もしらすきえし
かけるふ

手習 身をなげしなみたの川のはやき瀬をしがらみかけてたれか
とゞめし」(卅四オ)

夢浮橋 のりのしと尋るみちをしるべにておもはぬ山にふみまど
ふかな

右図するは源氏六十帖の歌香の図なり抑源氏物語のおこりは一糸
院の御時上東門院へめぐらしき草紙や待ると尋給へは紫式部うけ
給はりて江州石山寺に籠り觀世音にいのり通夜しける比は八月十

五夜の月湖水にうつり心沈けるにまつ須磨あかしの巻をかき？
次第ノ、心に浮ける俣すくに五十四帖と成りしをよるこひ歸りて

大納言行成卿清書し給ひ齋院へ参らせられけるとなり」(卅四ウ)
産帯要録(にんしんのこゝろえ)

夫婦人懐胎は子孫繁昌の基なれはいかにも身持大切に片そば
だち片足だちせず身を斜に座せず目にあしき色を見ず耳にあしき

ことをきかず口に異なる食を味はず常に身を動かして体を休めず
唐土には胎教とて仁義貞潔の道を熟読し心を正して行義をよくす

るときは胎子伶俐といふ仮初にも高きに登らず足つまだてず高き
処のものを」(卅五オ)とらず人だち多き所に行かず心を鎮めて

物驚く事なかれ夜はぬるに足を伸すべからず腹たていかるべから
ず元より人といさかふ事を慎みかく心得て十月が間養生なさんに

は難産といへる事なきものなり必ずこのいましめをそむきて己が
随意に身を安くするときには多く産にのぞんて六かしき事あり恐れ

つゝしむべし又其はじめくはいにんかめぐりの悪きかしれがたき

ときは験胎教を用ひ試むべし」(卅五ウ)

川 志乃当帰五分

右二味粉にして艾の煎じ汁にてもちゆへし懐妊ならはしはらくして腹のうちすこし動くやうに覚ゆべしもし動かざるときは懐妊ならず医薬を用ゆべし」(卅六オ)

一九ヶ月めの九日に醴を小き器に九つくみおき産婦ひとり飲べし又生貝壹つをいかやうにも煮てこれも他の人に配ずして産婦ひとり喰べしこれは乳の垂る咒なり

一臨産催(けのつき) たるとき髪を三くしとくべしさん後に髪ぬけず又くるき絹又はもめんにて鉢巻あるひは前かみにてもくゝるへしさんごづつうくせつかずいづれも奇妙也」(卅六ウ)

産前産後食物善悪

産前あしき物

たい たこ 川うを えび かれ なまず どじやう うろこなき魚 かに しゞみ こんぶ すべりひゆ もち 松だけ くさびら類 ねぎ」(卅七オ) めんるい くずの粉 唐がらし こんにやく くわゐ すもゝ あんず なし かき みかん 粉ふきがき からし つくねいも 惣じてからきもの くさきものにほひたかきもの

右等つゝしむべし別して粉ふきがきは大にわるし

さんごあしきもの

たい たこ ふか わらび たで なすび そば にんにく こんにやく いも さんせう こせう あぶらけ さけ す こんぶ たけるい くだもの」(卅七ウ) めんるい かき

同養生

男女のまじはり わきがある人 せいきをつくすこと おどろく事 早く髪をすくこと ぎやうすい つめとる事 手足をひやすこと これらきつとつゝしむべし」(卅八オ)

さんごよきもの

こい 牡蠣 するめ くらげ とびうを なます はも きすご

ひこもし むぎ あづき ちさ たんぼく ほし菜 いものはごぼう ほしずいき

右等乳にめぐりてよし

さんご三日めにあかいはしひと箸くふべし多く喰はあしくかくなしおけば過てあしきさかなをくひてあたらずといへり さんもし六かしきには 苡(よくい) 仁粉にして挽茶ほど用ゆべし」(卅八ウ)

掛香之方

梅花

一竜腦 八分 一梅仁 一匁五分
一麝香 六分 一丁子 二匁
一甘松 三匁 一白檀 二匁
松かぜ

一白檀 二匁 一龍腦 一分
一沈香 一匁 一菊花 八匁
一麝香 三分 一白檀 二匁
あやめ

一沈香 一匁 一丁子 八分
一白檀 一兩二分 一甘松 八分
一麝香 四分 一龍腦 二分
名方

一香 一匁 一丁子 二匁
一甘松 十匁 一麝香 三分」(卅九オ)

右薬味製法

一麝香 紙一よつゝみて入
一龍のふ 右に同し
一白だん あら／＼と刻
一沈香 同断
一香 青葉也茎をさり葉ばかり用

一甘松 水にてあらひ酒をうち陰ぼしにして用

一 ちやうじ 　あら／＼と刻

一 梅仁 　同断

一 菊花 　花をむしり紙につゝみ一二日おしをかけをく」(卅九ウ)

しみものおとし

小袖にあぶらの付たるは水一升に塩一合入よくわかし少しさましてあらふへし又滑石の粉をふりかけ紙を敷て火のしをかくべしうるしの付たるはみそ汁をわかしあらふべし

田はこのやにの付たるもみそ汁にてあらふべし

雨のもりのかゝりたるは塩ゆにてあらふへし

うを鳥の血あぶらのつきたるはかふらの汁にてあらふべし

人の血の付たるは生姜」(四十才)うすくへぎてうへにをきおもしを置ば血うつりておつるなり白きものに付たるは燈心をつばきにてぬらしするべし

おはぐろの付たるは米の酢をせんじてあらふべし

とりもちのつきたるにはどぢやうのぬめりにてあらふべし

しぶのつきたるはとうしんをせんじあらふべし又かつほぶしをせんしあらふ又みそ汁もよし又麻のあくにても落るなり」(四十ウ)

そめもの秘伝

もへぎ色をそめるには下地をそらいろにそめかりやす二へんかけうへのとめにはかりやすにめうはん入てそめてよし

すゝたけ色はべんがらを豆の汁にてときそめるなり

そうでんちやは下そめをむめのしるにて三べんそめうへにもゝかわを一へん染とめにもゝかわのしるにめうばんたしかね入てそむるなり

惣してちやをそむるは」(四十一才)もゝかわにて仕立る也くろみはだしかねあをみはめうばんとろはにてよし黄みはめうばんあかみはあくにてよしあるひはすはう梅のしるなどにて赤みを付る好によるべし

ふじ色はあかねにしやしやきのあくとたしかねすこしと入てそむる也

にせふしいろは木ふしをせんじそめてそのうへを水にだしかね少し入て染るなり

にせくちはいろはう」(四十一ウ)こんにてしそめをしあかねにめうばん入引てよし

あいみるちやは下そめをはないろにしてもゝかわのしるを二へんかけ其のちもゝかわのしるにだしがねめうばん少し入そむるなり

せんさいちやはいみちるちやにくろみをおゝく入てそむるなりだしがねのせんじやう鉄のせんくず五十匁水一升酢五合入て右を八合にせんじつめる也」(四十二才)

諸病めうやく

面ていのやまひには白附子をさけにひたし付て顔にいつる万病を治するなり又ク口なますにも妙なり

顔のくろきには冬瓜の実を粉にして顔をあらひ又丸じて呑むくてよし妙也

しらがをそむるには黒大豆を酢にてせんじびん水に用べし又ざくろの皮もよし

髪ぬけるにはかやくるみこのてがしは水にひたしびん水につかふべし

あせぼにはまくり貝をやきうどんの粉を半分ませ」(四十二ウ)布に包みふりかけてよし

にひきには蜜陀僧の粉を乳にてときねさまにぬりてあくる日洗ひさるべし四五度にていゆる

しもばれは茄子のへたとひともしとをせんしあらふ又六月六日十六日廿六日にのひるをとりつきたゞらかし日にほし置て冬もちゆべし

ひゞに棟(あて)の実をにしり汁をつけてよし又かしはの葉であらふもよし

あざは六月にあかぎをとりくるやきにして石灰とおしあわせつ
ぼにいれ」(四十三才) 水ひたノノに入そのうちへもち米をいれ
米のとろけたるときあさを竹へらにてこそげそのうへに右のくす
りをつけ紙をはるべし

ほくろぬきくすり

灰石ばい等分にあわせ水にてこねその内へもち米をうへをきはれ
の咲たるを取つけてよし

いぼをぬくにはいぼの大きに紙にてくたをこしらへいぼにきせ
火をつくればいぼのきわまでやけるなりかくのごとく二三火ほど
すればいぼ夜の間にあつるなり」(四十三ウ)

かみはへくすり

山叔 白 (びやくし) 川 (せんきう) 各十刃 万莉子

れうノ香 附子 各五刃

右こまかにきざみきぬにつゝみしらしぼりのあぶらに廿一日ひた
し置て一日に三度つゝはげたる所あるひはかみうすきところにぬ
るべし無用の所につけざるやうにすべし

あらい粉の方

丁子 白附子 けんごし 白 (びやくし) 白姜蚕 白 (は

くきう) 白蔴 茯苓

右粉にしてあさノノかほをあらへば艶を出し玉のごとくすきとほ
ること妙也」(四十四才)

七夕祭の事

七夕といふは牽牛織女の二星をすべてよぶ事にて男たなばたを彦
星といひ女たなばたを織姫といふ今の世に絵くところを見るに牛
を牽たる風情を図し侍れとも誠には河越 といふほしにて牽牛に
はあらざるなり右まちノノの説は唐土のことを我國につたへたる
よしなれともたなばたといふ名は殊に年ひさしきものなり」(四
十四ウ)

女中詞の事

小そでは ごとく

おびは おもじ

よぎは よるのもの

かやは かつう

とんすかやは どんてう

もめんかやは めんてう

はながみは おさつし

べには おいる

水は おひやし

こめは うちまき

めしは まゝ

みそは むし

さけは 九こん・さゝ

あまざけは あま九こん」(四十五才)

こぬかは まちかね

せきはんは こわぐこ

まんぢうは おまん

ちまきは まき

もちは かつん

ぼたもちは おはぎ

あづきもちは あかのかちん

しんこは しろいと

だんごは あしノノ

まめのこは きなこ

たうきび餅は もろこし

よもぎ餅は くさのかちん

わらび餅は わらのかちん

そばかい餅は うすずみ

むぎは むもし

あわは おみなへし」(四十五ウ)

なめしは 葉のぐこ

そうめんは ぞろ
 とうふは おかへ
 こんにやくは にやく
 とうふのかすは ゆき
 でんがくは おでん
 ひしほは あまむし
 しゃうゆは おしたし
 なすびは なす
 ほしなは ひば
 ほしうるは ほりノ、
 大こんは かうもの
 ごぼうは こん
 かうの物は かうノ、
 くきは くもじ
 まつたけは まつ「(四十六才)
 たけの子は たけ
 しほは なみのはな
 かずの子は かずノ、
 いわしは おむら
 たこは たもじ
 ごまめは ことのばら
 するめは するノ、
 すしは すもじ
 糸びは 糸もじ
 錢百文は 一トすじ
 なべかまは くる
 いかきは せきもり
 すり木は とがらし
 しゃくしは しゃもじ
 せつかいは うぐひす

哥かるたは ついまつ「(四十六ウ)
 知死期時
 (表省略)
 新衣服着物吉方
 (図省略)
 此方にむかひて着そむれは衣服に糸あり「(四十七才)
 十二月の和名
 正月 初空月 睦月 初見月 子の日月 霞初月
 二月 着更衣 梅見月 小草生月
 三月 弥生 桜月 花見月 末の春
 四月 卯月 常?月 花残月
 五月 早月 賤男満月 月不見月 橘月
 六月 水無月 風待月 常夏月 鳴雷月「(四十七ウ)
 七月 文月 親月 文披月 七夕月 女郎月
 八月 葉月 月見月 秋風月 紅染月 中秋
 九月 長月 梢秋 紅葉月 小田川 寢覚月
 十月 神無月 時雨月 小春月 初霜月
 十一月 霜月 雪見月 霜降月 神楽月
 十二月 四極 春待月 乙月 梅初月 深冬月「(四十八才)
 琴三絃の事
 琴は楽器の一つにていにしへの聖賢もこれをもて遊びたまふ日本
 にわたりしは宇多天皇の御宇に命婦石川の色子といひし人筑紫彦
 山にて唐人にあひて箏のことをつたへ天皇に授けたてまつるとな
 り神代のむかしは弓六張をならへてひきならし神楽に用ひける也
 今日本に用るは箏のこと也
 三絃は阮咸といふものをうつしたるものなり楽器にあらず陰声な
 るものなりひきならひ給ふ事ゆめノあるましきもの也「(四十
 八ウ)
 琴の名所
 (図省略)「(四十九才)

三絃の名所

(図省略) (四十九ウ)

うんこう日

正月 ひつし 二月 いぬ

三月 たつ 四月 とら

五月 むま 六月 み

七月 とり 八月 さる

九月 い 十月 ね

十一月うし 十二月う

うけむけの事

木性 とりよりう迄七年うけ

たつよりさる迄五年むけ

火性 ねよりむま迄七年うけ

ひつしよりい迄五年むけ

土水 むまよりね迄七年うけ

うしよりみ迄五年むけ

金性 うよりとり迄七年うけ

いぬよりとら迄五年むけ

守本尊を知る歌

ねはせんじゆうしとらこそはこくうざう

うはもんじゆにてたつみふげんぞ

むませいしひつじとさるは大にちに

とりはふとうにいぬは八まん (五十才)

不成就日之事

正七月 三日 十一日 十九日 廿七日

二八月 二日 十日 十八日 廿六日

三九月 一日 九日 十七日 廿五日

四十月 四日 十二日 廿日 廿八日

五十一月 五日 十三日 廿一日 廿九日

六十二月 六日 十四日 廿二日 卅日

願じやうじゆ日

正月とら 二月み 三月さる

四月い 五月う 六月むま

七月とり 八月ね 九月たつ

十月ひつじ 十一月いぬ 十二月うし (五十ウ)

折形図

(図省略)

よみくせ

百人一首ひやくにんしゆともたせよむへし 天智天皇てんぢの字

にぎりてよむ 持統天皇ちとう二字共すみてよむ 山辺赤人やま

べとにごる 喜撰法師此人はかりはほつしとよむへし 磨いつれ

もまるとよむへし 陽成院やうぜい共やうしやうともよむ

????????とよむ 文室ふんやすみてよむへし 壬生みふす

みてよむへし 坂上さかのとよむ 深養父ふかやぶとよむ 文室

朝康あさやすとよむべし 赤染ぞめとにごるべし 権中納言ごん

ぢうとにこりてよむ 行尊ぞんとにこる 崇徳院すくとよむへ

し あまのかぐ山くの字にぎりて ひとりもねんかをも上へ付る

つくはねのはの字すみて 月見れはちゞに物こそちゞとよむ

ありあけの月を待いでつるかなとよむ 人いれすこそ思ひそめし

かかの字すみてよむ 人にしられでての字にこるへし かたみに

そてをしほりつゝしをりつゝとよむ あふことのたへてしなくは

しの字うへに付てよむへし ゑやはいふきのいうきとよむへし

滝川のたきがわとにこりよむへし

猶此外りうきによりてかわり有へし伝をうくへし

万本類おるし所 古本売買江戸錦絵類

浄るり五行丸本るい絵本いる / 往来物百人一首道中記

諸宗御経和漢観世流????何によらす御座候

大坂書林 大坂心斎橋通南本町 河内屋平七 (裏見返し)

